

月刊

GPP



Vol.65

令和3年3月号

株式会社
グロースパートナーズ

変革の波は必然的にやってくるものだ

三寒四温は3月に入ってからであったが、2月初旬から始まった。
これも地球温暖化の現象だろうか・・・

セメント産業は地球上の全CO₂排出量の5～6%を占めていると言われる、カーボンニュートラル社会に向けての悪玉だ。「どうやってセメントを減らすことができるか」が世間の関心事であった。それが一転、角度を変えると、全く別の景色が見えてくるから不思議だ。

セメントはその製造の過程において燃焼と化学反応でCO₂を排出するが、そのセメントと骨材と水を混合させて出来る生コンクリートはmあたり約0.4トンのCO₂を排出し出来上がると言われている。一方、そのコンクリートは空気に触れることで今度はCO₂を吸収する特性を持っていて、排出分のうち約80%、つまり約0.3トンを最大で吸収することが出来る。ポイントは「空気に触れたら」である。触れていないコンクリートはCO₂を吸収しないし、言い方を替えれば“まだ”CO₂を吸収していないのだ。

空気に触れる為には、空気に触られるようにしてあげればよい。例えば、透水性コンクリートは多孔質であるから空気に触れる面積が広い、即ちCO₂を吸収しやすい。残コンにセルドロンを攪拌して碎石状にしてしまえば、比表面積が増えてどんどんCO₂を吸収するはずだ。RC躯体を解体したいいわゆる“コン殻”は、殆どがまだ空気に触れたことがない、即ちこれからCO₂を吸収する大切なツールになるはずだ。

生コンクリート業界は組合による独占販売が認められ、生コンプラントは保護されている。保護されているから、新しいことにチャレンジする必要は無い。ところが地球全体がカーボンニュートラル社会を目指すステージになって、“固める”事だけが役目だったコンクリートに、今度は“CO₂を吸収する”という新しい役目が加わることになりそうだ。いままでの同じ思考回路、同じやり方、同じ枠組みで、その新たな役割を果たすのは難しいだろう。変革の波は、静かに、そして必然的にやってくるものだ。

藤井 成厚

残コンの環境破壊について

東京地区生コンクリート協同組合のHPをみると、「無駄コンゼロ計画」というバナーがトップページに記載されています。
バナーを開くと、このエリアの残コン、戻りコンの状況がわかるカタログが開きます。

※東京地区生コンクリート協同組合のカタログURL
<https://www.t-namakyō.jp/pdf/mudaconzerokeikaku-a4.pdf>

このカタログによると、無駄になった生コンは **14万7,000m³/年**
1棟100戸規模のマンションが **25棟分** ※1棟6,000m³で換算
の生コンが無駄になっているようです。
※これは、東京地区生コンクリート協同組合だけの数字です。

さらに、無駄になった生コンは処理作業が行われた後、栃木県などの中間処理場に産業廃棄物として運ばれているようです。
東京から栃木まで**120km**を年間**3万1,238台**の運搬車両で運ぶようです。
どれだけ二酸化炭素を排出しているのか。。。

菅総理大臣は「2050年までに温室効果ガスの排出を全体としてゼロにする」と表明していますが、建設業界も変わらないといけないと思います。

1回の量は少なく小さなことかもしれませんが、積み重ねた**14万7,000m³**もの生コンを無駄にしています。
生コンは、資源であり限りがある材料です。

現場で生コンを余らせないことが一番重要ですが、余ったものを有効活用させることも大事です。

残コンをセルドロンで砕石にし、利活用することもご検討ください。

あるゼネコンさんは、セルドロンに注目していただき、多くの現場から一斉に注文をいただいております。
これからの社会のために、セルドロンを活用してみませんか。
ご検討宜しくお願い致します。

まずは、お試しでご活用下さい。ご連絡をお待ちしております。